

保 育 の 実 践

※ 以下実践報告の中に記載している
子どもの名前は全て仮名である。

—親と子が共に育ち合うための保育環境づくりを通して—

3歳児（いちご組）担任 野津道代

はじめに

本園における、最近の保護者に見られる社会的な背景として、以下のことがらがあげられる。①地域社会とのつながりが薄い②核家族が多い③近隣の保護者同士での子育ての連携や協力関係が希薄になっている。などである。その為母親が孤立化しやすく、近年次のような傾向が強くなり現れるようになってきた。

- 子育てに対する迷いや不安が大きい
- 子どもへの対応に自信がなく、子どもや子育てへの過剰な心配をする
- どの子にも共通する発達上の課題を「うちの子だけが」と思い込んでしまう
- 母子分離への不安が大きい

このような傾向から、私（3歳児いちご組担任）は「保護者自身が保護者として成長する場を提供していく」（文科省・「新しい時代の幼稚園教育を実現するための施策提言」H12.7発行）ことの必要性を実感し、H13年度は「親と子が共に育ち合うための保育環境づくり」を目指して学級経営と実践に取り組んできた。

1、保育の課題

- ① 保育者と保護者の信頼関係を築くことを基盤として、保護者同士の横の関係づくりを図る。
- ② 保護者（特に母親）との連携・協力による保育環境をつくり、保育の内容を豊かにする。

以上の2点を主眼とした。

2、実践の取り組み—以下の視点から内容を充実させていくことを目指した。

- ① 入園時期の親子の受け入れ方を見直し、母親の存在を生かす保育環境を構成していく。（平成12年度より実践—H12年度研究紀要第33号各論3）
 - 母子分離が困難な母子の受入れ
 - 保護者参加型の「一日保育参観日」の設定
- ② 保育者と保護者の信頼関係を築くことを重視し、保護者の子ども理解と解釈の共有を図る。（事例1）
- ③ 保護者同士のコミュニケーションとつながりが持てるよう、多様な保育参加の場や時間を保証する。（事例2）
- ④ 保護者と連携して保育環境をつくり、保育の内容として位置づけていく。（事例3）

3、研究の仮説

- ① 入園後の母子分離不安を強く表わす子どもの場合、母親の日常的な保育参加と保育者・保護者による子ども理解のための連携およびカンファレンスによって、母と子双方の分離への不安を解消し、より確かな自立感を培っていくことができるのではないか。(平成6年度より継続研究)
- ② 親が自分の子どもだけではなく、周りの子どもたちとふれあい、遊びの場を共有していくことによって、子ども同士のふれあいと友だちへの親しみの感情をもたせ、子ども同士の自発的な関わりをうながしていくのではないか。
- ③ 親同士の連携と協力によって、保護者が主体的に推進していく活動を保育内容の中に位置づけていくことによって、子どもの遊びのイメージを豊かにしていくとともに、子ども同士の関わりが柔軟に広がり、互いの気持ちやイメージを受け止め、響き合っていく心の素地が培われていくのではないか。

以上の仮説から、事例を分析・考察し、3歳児の発達に及ぼす影響を探っていく。

4、研究の対象

平成13年度3歳児学級の子ども（男児10名、女児10名）および保護者

5、研究の方法

- ① 日常的な保育参観・参加の場の中での保護者（特に母親）と子どもの関わりの様子を継続的に観察記録することによって、相互の影響と変容を捉えていく。
- ② 母親から寄せられた手紙（思い・感想・気づき）を参考にする。
- ③ 保護者同士の連携・協力による活動を保育の内容の中に位置付け、子どもに与える影響を探る。

以下、事例文中の幼児名はすべて仮名である。

実践事例—1 「お母さんと一緒」の環境の中で培われているもの

今年度の3歳児、いちご組の子どもたちは、20人中17名が入園後初めて集団の中に入った子どもたちである。入園前に近所の友だちと遊んだ経験には個人差が大きく、殆どの時間を母親と二人だけで過ごしてきた子どももいる。入園当初、母親から離れられない子どもは5名いた。

「母親から離れられない」という原因や理由は、一人ひとりの子どもによって異なり、また、保護者（特に母親）の構えや気持ちが大きく影響しているように思われる。

したがって、母親から離れられない子どもをいつ、どのようにして離れて遊べるようにしていくかという課題は、母親との毎日の話し合いによる相互理解と保育者の方針に対するインフォームドコンセントを前提にして共に考え、現実に対応していく必要がある。

例えば、A) 母親が傍にいれば、自由に遊べ、友だちとも関わっていける子どもの場合と、B) 母親が傍にいても警戒心や不安感を強く持ち、友だちへの関心を示さない子どもの場合とでは、母親と一緒に過ごすということの意味が異なっている。A) の子どもたちの場合は、1週間前後で次第に幼稚園の環境に慣れ、保育者への親しみをもち始め、母親がその日の様子をみきわめて、タイミングを見て家へ帰られても耐えて遊べるようになった。

一方、B) の子ども（としひろ=仮名）は、保育者がコミュニケーションやスキンシップを持とうとしても拒み、他の子どもたちとの関わりを避ける傾向が強く見られた。

この度の実践では、保育の課題を子どもの立場からだけでなく、母親と子どもの関係の中で捉え考えようと試みた。事例1では、としひろを中心にして、母親と一緒にいる環境の中で、どのような状況が生まれ、としひろとまわりの子どもたち、および母親にどんな影響を与えているのかということ、分析・考察していく。

としひろの発達に期待する姿（平成13年度）

自ら納得して母親と離れ、やりたい遊びをみつけ、友だちの中で遊べる。

記録の概要と、時期時期の環境の構成

第1期4月14日～4月20日まで、保育者や周りの友だちに対する警戒心が強く、声をかけられても関わろうとしない。母親が傍らで見守る中で、一人で自転車の洗車や、砂でのごちそうづくりなどをして過ごした。

4月21日 ひこうき（遊具）から降りられないで泣いているりさを、としひろの母親が助けたことをきっかけにして、としひろは初めてりさ、こうへいと一緒にすべりだいを楽しむ。

4月26日 としひろの母親と一緒ににわとりを見に行った数人の子どもたち（ふみこ、りさ、ともお）と共に母親に絵本を読んでもらう。この場の中で、初めて友だちとのふれあいを経験し、にわとりを見に行くとき、友だちと手をつなぐことが出来た。（ステップ1）

4月25日の母親からの手紙

- *けんちゃんが泣いている姿を見ているとしひろの顔は、口の周りが微妙に動いている。お母さんにおつかっていきけんちゃんの姿を、今度は「だめだよ」という。「でも、としひろだってお母さんにするでしょ」と言うと、何も言わず、だまってけんちゃんとお母さんを見ていた。
- *ベランダに出ているときに、つき組のお兄ちゃんたちがカタツムリをつかまえて見せてくれた。すごく欲しかった。てつやくんが、かたつむりのいるところを教えてくれ、4匹自分から捕まえに行く。ケースの中に入れて貰おうと思い、昇降口へ。「せんせい」「せんせい」と大きな声。「聞こえないから上がって入れておいで。」という、一人で行く。初めて離れた瞬間でした。

* 「せんせいとさよならしないの？握手しておいでよ」なかなか行かないので、「としひろは今日幼稚園でお泊りだね。せんせいとさよならしないとお泊りだよ。」あわてて先生のところへ。ちょっとまずかったかなと思いましたが、せんせいと私のうれしそうに喜んだ姿をみて、何か感じてくれば、とひそかに期待しております。

* おべんとうの時、近くにいたあすかちゃん。なぜか「せんせいとあすかちゃん、ママととしひろと4人で本を読む」これも今日、しつこく言っていました。

ペンを取ると、短時間の幼稚園生活の中でいろいろなことを経験しているんだなとつくづく感じさせられました。

保育者の思いと環境の構成—ステップ1

4月26日、お母さんが園庭で絵本を開き、それをとしひろと一緒にともお、ふみこ、りさ、たかしたちと一緒に頭を寄せ合って見ているという場面があった。保育者は、前日にとしひろが「のつせんせいとあすかちゃんと、お母さんと4人でほんを読む」と言っていた、としひろの思いと重ね合わせて、この場面でもし出されている共有する雰囲気うれしく見つめた。短時間ではあったが、子ども同士の気持ちがつながり合って、その後、にわとりを見に行こうと、初めてとしひろが友だち（ふみこ）と手をつないだ。そして、保育者とも手をつなぐことができた。そのことは、としひろがお母さん以外の他者を信頼していくための最初の一步であり、また他者への信頼関係が持てるということは、自立へと向かっていく一步を踏み出したことであると受け止めた。入園後、実質9日間の成果を見たように思えた。なお、この時期は、周りの子どもたちも不安定であり、お母さんの持っている、保育者とは違うふんいきを拠り所にしてとしひろの母親の周りで遊ぶ姿が見られた。としひろの母親も、この頃はとしひろだけをみつめていることから脱して、他の子どもにも接したり、ちょっとしたお世話をしてくださるようになっていた。このような状況や場を支えていくことによって、としひろとまわりの子どもたちを自然にふれあわせていくことができると考え、そのことを母親に伝えて共に見守っていく。(ex 5 / 28保育者が発端をつくって積み木の家を構成する。多くの子どもたちが寄り集まってきたので、この場の中で、お母さんに絵本を読んでもらう。その後、多くの子どもたちが、積み木の「おうち」を共有して遊んだ—写真記録)

としひろは、4月26日のことをきっかけにして、りさ、ふみこ、こうたと関わって同じ遊びの場で遊べるようになっていた。だが、絶えず母親の存在を確かめ、母親が距離をおいて離れてみると不安を表わす。

5月21日 ふみこと対のつながりを持ち、二人だけで一緒にいることで安定し、短時間なら、母親が少し距離をもって離れていても子ども同士の中で遊べる。(ステップ2)

5月23日 初めてふみこ、けんじ、ちかたちと一緒に階段跳びに挑む。その後、23日、24

日と階段跳びを続けていき、多くの友だちの中で一緒に「でんしゃごっこ」を楽しむとともに、5段目から跳べたことで自信を持ち始める。5月25日現在では、母親は意識的にとしひろから離れて他の子と関わっている。が、としひろの目は、ふみことの気持ちのつながりを持って遊んでいても、母親の存在を絶えず確かめている。(ステップ3)

5月25日—母親からの手紙

幼稚園に行きたい思いは強かったのですが、登園したときからいつもと違い、としひろの傍らにはりさちゃんの姿はなく、誘ってもものってきてくれませんでした。りさちゃんに頼れなく、お友だちの中にも入れず、困ったのですね。(中略)いろいろやってみましたがいま一つ遊びが続かず、「お母さんブランコ、おかあさん」家で甘えているときのようでした。

後半、ふみこちゃんの登場で、としひろの行動に変化が。私から離れ、ふみこちゃんと手をつなぎ、遊びに夢中。あの階段跳びが面白かったのか、「明日幼稚園やってる？またするよ」と張り切っています。登園時の足の重さもどこへいったのか、とても足が軽く降園させていただきました。私が充実して降園するのですから、本人はもっと充実していると思います。明日はどんな一日になるか楽しみです。先生の胸に飛び込んだ姿、見たかったです。(5/24階段跳びの後、ふみこと二人で保育者のいるところまで駆けて来て、初めて抱かれる)

大きく前進した一步。有難うございます。としひろのお陰と園の方針のお陰で、我が子の成長を先生だけでなく、先生と一緒に見れるということは、とてもうれしいことだと私は思います。

保育者の思いと環境の構成—ステップ3

この時期のとしひろに対する保育者の判断は、としひろが母親と離れていても遊びに没頭し、ある程度の時間、母親の存在を確かめなくなる時期、同時に保育者に対しても信頼感がもてるようになる時期を待とうと考え、母親の了解を得た。

5/25日の手紙の中で、「我が子の成長を先生と一緒に見れるということは、とてもうれしいことだと私は思います。」と書いておられるように、保育者と母親は、毎日としひろの姿を同じ場の中でみつめ、少しずつ変化していく姿を捉えながら、としひろの行動の意味するものや、その時に経験していることについて語り合っていた。そのことによって、母親は、自分の子どもの様子を少しずつ距離をおいて客観的に見つめられるようになった。そして、母親が、他の子どもにも目を向け、関わっていかれたことによって、周りの子どもたちが安心感を持って一つの遊びの場を共有し、子ども同士の気持ちのつながりも深まっていた。

6月に入ると、としひろは母親が距離をおいて見守る中で、数人の友だちの中で遊びの場を共有して遊べるようになった。また、その中で自分らしい言動を表わしていけるようになってきたので、階段跳び、泥遊びなど少しずつ出来るようになってきたことがらを認め、自信を持たせるようにした。

4期・9月

だいすけ、ともおと自転車での遊びを続けていく中で、気持ちのつながりを深めていきつつ、赤土での遊び、ウルトラマンごっこ、おみせやさんなどのイメージを共有して遊べるようになっていったが、母親が途中で帰ろうとするとパニックになり、一緒に帰ろうとする。

9月6日 初めて母親が登園時に強引にとしひろを置いて（保育者にゆだねて）帰る。

としひろは、30分程保育者の傍らで泣いて過ごす。その間に、ふみこ、きえ、さちこ、たちがなぐさめたり、一緒に遊ぼうと誘いかけたりし、としひろはなんとか立ち直って自転車での遊びに向かい、一日を無事に過ごした。が、翌日から登園を拒否する。「もう、幼稚園はやめると言っています。」という母親からの電話があり、家庭訪問をしてとしひろとの信頼関係を修復していく。

9月27日 母親が疲れを出して、保育時間の中途にとしひろを連れて家に帰られる。翌日も、としひろを連れてこられたが、母親の表情に明らかに困惑と疲れが色濃く表れている。

保育者の思いと環境の構成—ステップ4

9月28日の母親の表情から、これ以上母親が同伴することは無理であると感じ、保育者は翌日母親に次のように話す。

「今のとしひろくんは、幼稚園の環境にすっかり慣れられて、お友だちの中で自分らしい言動も表わして遊べるようになっていきます。つまり、この時期の発達の課題は、十分にクリアしています。ただ、お母さんに対する執着心が非常に強いので、この時期にお母さんの関わりかたを変えていく必要があるように思います。思い切ってお母さんの方から離れてしまうか、短時間ずつ離れていくトレーニングをしていくほうが良いのか、その方法について、もう一度考えてみましょう」と。担任としても、前回早まってしまった失敗があり、決定的な方策を出せないでいたが、翌日「お父さんの協力も仰ぎながら、少しずつ離れて過ごすようにします」と母親の方から結論を出された。そして、翌日から「どうしてもしなければいけない仕事があるから」ということを理由に、短時間ずつ離れて過ごすレッスンを始めた。10月2日から、10月21日までの間、土曜日は父親が送り迎えをするなどの協力を得ながら、しだいに母親と離れて過ごす時間を長くしていった。

10月22日 としひろは、登園時「お母さん、さようなら帰っていいよ」と、言って、だいすけ、としおと一緒に自転車での遊びに向かっていく。

以降、自転車や泥での遊びを通して友だちとのつながりを広げていき、保育者への信頼感を深めながら、しだいに自立感を確かにしていく。5期・1月中旬には、未だ出来ないことにも挑戦し、実現するまで続けていく粘り強さも見られるようになった。

事例1の考察

① お母さんと一緒の環境の中で、としひろと周りの子どもたちが経験したこと

この度の事例は、これまでの事例の中で、お母さんと一緒に過ごした期間が最も長期に及んだ。もっと早い期間で離れることが出来るようにする方法はあったと思われるが、保育者の方針として、「子どもが自ら納得して母親と離れ、自分がやりたい遊びを見つけ、友だちと関わって遊べるようになる」ということを、としひろの発達における最初の課題であると考えたので、ステップを振り返ってみて、としひろにとって必要な期間であったと思う。この期間の中で、としひろは次のような経験を重ねていった。

ステップ1・幼稚園という環境の中で、いろいろな物やことに目を向け、安心感をもって過ごす

ステップ2・母親と一緒の場の中で、いろいろな友だちとふれあう。しだいに友だちへの警戒心を和らげて行く

ステップ3・母親と一緒の場の中で、数人の友だちと遊ぶ楽しさを味わう

- 気に入った遊びを見つける
- 気に入った友だちと一緒に気に入った遊びをする
- 特定の友だちとの気持ちのつながりをもって、いろいろな遊びに挑戦していく
- 友だちの中で自分らしいイメージや思いを表わして遊ぶ

ステップ4・母親と離れて過ごすことができる。

- 母親と離れても安定して遊べる

以上ステップ3までの経験の内容は、としひろだけではなく、としひろの母親の周りで一緒に遊んでいた数人の子どもたち（ふみこ、ななこ、ともお、りさ、まお）にも同様にあてはめることが出来る。つまり、子どもたちは、いつも一緒にいて見守ってくれる母親がいる環境の中で安心感を持ち、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わい、友だちと関わる基礎的な力を身に付けていったといえる。特に、ふみことななこは、としひろの母親を心の拠り所にして安定していき、としひろとの関わりを通して他の友だちと関わっていく力が培われていった。

② 母親が経験したこと

ステップ1 ●子どもと共に、幼稚園のいろいろな環境に目を向けていく

- いろいろな子どもとふれあう
- ステップ2 ●いろいろな子どもと接したり遊んだりする中で、我が子の姿を少しずつ客観的に見つめていく
- 保育者と共に子どもを見つめ、語り合う中で、一つ一つの遊びの場の中で子どもが経験していることや、行為の意味を理解していく
- ステップ3 ●どの子どもにも愛情をもって接していく
- 周りの友だちとの関わりの中で、子どもが成長していく様子を肌で感じる。
 - 保育者への信頼感を持つ
- ステップ4 ●これまでの我が子への関わり方を振り返り、これからの関わり方について考える

ステップ3までの期間は、ゆるやかな歩みであったが、としひろが周りの友だちと関わって遊ぶ中で、一步一步確実に成長していく様子を、母親も喜びながら、ゆとりをもってみつめていられたように思う。しかし、9月を迎えても一向に母親から離れる様子はなく、母親の中で焦りが生まれてきた。そして、9/6の登園時に強引に我が子を置いて帰られたことによって、しばらくとしひろが登園を拒否するという事態になった。このことを通して、焦りは逆に不信感や不安感を募らせるということ。あくまでもとしひろの納得の上で離れなければこれまでの積み重ねの意味がなくなるということを保育者と一緒に考え、話し合った。そして、数日後、母親自らが結論を見出し、方法を考え、実行していかれた。この決心によって、父親も積極的に協力し、としひろも自ら納得して離れるという、大きな課題をクリアすることができた。

④ 保育者としての経験と反省

これまで、2つの事例を通して、「母親と一緒にいる環境」の中で、本人と周りの子どもたちが安定し、自然な形で友だちへの親しみをもち、関わりを持って遊べるようになるとともに、自信や自立感を確かにしていくことを実感してきた。このたびの事例を重ねてみて、幼稚園の中での母親の存在が、保育者の働きかけとは違う形で子どもたちの不安感を取り除き、互いの親しみやつながりを深めていくのに、有効に働いていることが実証できる。

一方、母親の立場に立って、「子育て支援」としての意味を考えると、必ずしもこの方法が全ての母親に適用でき、受け入れられるものであるということとは出来ない。まず、母親の抱えているさまざまな思いや事情を把握し、考慮していく姿勢が根底になければならないと思う。

この度の事例のように、母親から離れられないという子どもの状態が長期に及ぶ場合は、「いつまでこの状態が続くのか」という、見通しのない不安や焦りが母親を襲う。また、保育者も為すべき方途に迷うことがある。この時点で突破口になったのは、保育者が母親の思いをあるがままに受け止め、共有してきたこと。そして、双方が真剣に考え、悩み、話し合っ

いったことである。そして、最後の決断は両親にゆだねた。そのことによって、母親が自分と子どもとのこれまでの関わり方を振り返り、これからの関わり方について考えたとき、自力で問題を解決していく方途を見出すことが出来たのだと思う。このことから、課題をクリアしていくためには、保育者の解釈の一方的な押し付けや判断ではなく、「親の解釈」と「保育者の解釈」を対等に共有していくことが大切であることが解った。こうした意味で「子育て相談・支援機能」を捉えるならば、「個人懇談」あるいは「カウンセリング」のような話し合いの場だけではなく保育の実際の場面の中で、子どもの姿を共に見、語り合い、理解や解釈を共有していったこの試みは、一つの方法として意味を持つものではないかと思う。

実践事例2—母親の思いを受け止め、共有する

入園後一ヶ月ほどは、子どもだけでなく、母親の側の不安感も大きい。(個人差はあるが)それは、幼稚園の様子がよくわからないことや、先生に対する親しみや保育理解が出来ていないことから生まれてくるように思う。この時期は、登園時や降園時に努めて母親との1対1のコミュニケーションを持ち、その日の子どもの様子などを話したり、母親からの手紙に応えたりしながら、個人的な理解と安心を図るようにしてきた。

また、「一日保育参観日」(主旨についてはH12年度研究紀要・各論3参照)の後のグループ懇談での話し合いや、保護者の任意による「自由参観」が、保育者の保育方針や、子どもの姿を理解してもらう上で非常に有効であった。また、共通する子どもの問題を通して、母親同士が話し合える関係をつくっていくことにも力を注いだ。このことについて、ななこ(仮名)の母親からの手紙を通して述べる。

4月下旬、ななこの母親から、「ななこが毎日Kくんに追いかけられたり叩かれたり、怒鳴られたりしている、と訴える。いじめにあっているのではないかと真剣に心配している」という主旨の手紙を受け取った。保育者は、母親に「私も気をつけて見ていきますが、思い切って、このことをKくんのお母さんにお話してみませんか?」と返事をし、「私も一緒に立ち会いますよ」といった。それから2日後、次のような手紙をいただいた。

4月27日

(前文略)早速翌日、Kくんのお母さんにお話させていただきました。Kくんのお母さんは全くご存知ない様子でした。そして、Kくんのお母さんが昨日、家でそれとなく聞いてみたら、最初は「そんなことしてない!」と言ったそうです。が、「ななこちゃんのことがかわいくてあんなことをしてしまった」と認めてくれたそうです。そしてこれからは女の子を叩いたりしないでね。という話を家族の方からされたとのことでした。そして、Kくんのお母さんから、「話してもらってよかった!こういう話ができよかった

た！」といわれ、私も勇気を出して話してみても、お互い、親同士のコミュニケーションがとれて、本当に良かったです。(中略) このことでKさんと話をするようになって、私もKさんの性格やキャラクターもだいたい分かるようになってきて、どうしてななこのことを毎日叩いたりしたのかも分かって、本当にすっきりしました。そして、ななこも強く成長したなとほめてやりたい気分です。

6月1日

先日、幼稚園での様子を見せていただいて、(自由参観) 新たな発見がありました。まず教室にはいると、色紙が好きなお友達が「時計つくって」「カメラつくって」と集まってきました。最初、ななこは私の隣に椅子を置こうとするが出来ず、私のひざの上に座ってくる有様。今日もべったり離れないのかなあと考えていました。しばらく、発注された時計、カメラを必死に作っていて、ふと私の周りの子どもたちを見渡すと、F子ちゃんR子ちゃん、S子ちゃん、A子ちゃん……我が子の姿がなく、折り紙をしながら、目はななこを探していました。すると、テラスから出て、ひこうきのすべりだいで遊んでいたのです。ひとりでも自分のしたい遊びをみつけて、外へ出て遊んで楽しそうにななこの顔を見られて安心しました。親が思っている以上に成長してくれているんだなって感じました。

(私の方が子離れできていないのかも……)

おやつ時間、先生がいろいろな色のアメを配られて、「かえっこしてもいいよ」って言われました。ななこは緑色のアメをもって、「かえっこ出来るのかな」と見ていると、Kさんから「かえっこしよう！」と声をかけてくれて、かえっこしていました。Kさんとこんなに仲良しになれて、本当にうれしく思っています。その後F子ちゃんに「かえっこしよう！」と言われて黄色いアメになりました。でもとっても満足そうでした。おやつのアメ一つでこんなに楽しめるんですね！(後略)

入園前は、ななこは近所に友だちがなく、家では祖父母と母親、叔母に囲まれて過ごしていた。戸外での遊びの経験も乏しく、テレビか、絵本雑誌、既成のままごとセットなどのおもちゃで遊んでいた。その為、入園当初は、非常に不安感を強く表わし、友だちとどう関わっていけばいいのか分からないといった様子で、保育者か、他の子どもの母親の傍らで過ごしていた。ななこの母親も、母親同士のコミュニケーションを自分の方から持つことが出来ず、過剰な不安を一人で抱えていられる様子であった。

保育者はまず、ななこの母親の不安感を取り除いていくことが、ななこの不安をも取り除くことにつながると考えた。そこで、Kさんのお母さんの子育ての経験を見込んで、直接に問題を話し合うように向けていった。4月27日の手紙の中に「お互い親同士のコミュニケーションがとれて、本当によかったです！」と記してあるように、このことをきっかけとして母親同士

が心を開き、ななこはKくんの家に遊びに行くようになった。そして、「Kくんの性格やキャラクターもわかり、何故ななこを叩いたのかと言うわけも分かって、すっきりしました」と書かれているように、この時期の子どもの気持ちと行為の意味を理解することにつながっていった。その後、6月1日の自由参観を通して、ななこの成長を認め、同時におやつの中での子どもたちの様子を通して、保育の内容を理解されていることが伺える。このときの「アメのかえっこ」の様子については、お手紙を学級だよりに掲載し、子ども同士が互いに親しみを持てるようにし、関わりを柔軟にしていくためであったという保育者の意図を伝えた。以降、学級の保護者同士で進めていくいろいろな活動に積極的に参加されることを通して、母親同士のつながりを深めながら、親子ともどもに幼稚園での生活を楽しんでいる様子が見られるようになった。

実践事例3—「親子読書会」と子どもの遊びや関わりへの影響

「親子読書会」は、PTA文化部の企画によるもので、毎学期に一回ずつ学年単位で行う読書会活動である。

3歳児いちご組では、約30分の「親子読書会」を保育内容として位置付け、全員の親子で一緒に鑑賞してきた。内容は、絵本をもとにした手づくりのペープサートや、エプロンシアター、紙芝居、歌や手遊びが入るなど、多彩に工夫されている。

10月5日に実施された「親子読書会」の内容は、「ねずみくんのチョコッキ」という絵本をコピーして作ったペープサートと、「やきいもグーチーパー」のじゃんけん遊び、「はらぺこあおむし」のエプロンシアターであった。その中の「ねずみくんのチョコッキ」のペープサートは、お母さんからのプレゼントで学級の教材としていただいた。翌日早速、あきこ、ふみみこ、さちこたちが、母親がしていたようにおはなしの順を追ってペープサートを出していきながら、「えいが」を始めていった。すると、あきこたちの前に他の子ども達数人が寄り集まり、椅子を並べ、観客席を作っていく、ほぼ全員の子どもたちが座って見た。ペープサーとが終わると、ふみこが前に立ち、「やきいもグーチーパー」のじゃんけん遊びを始めていく。「親子読書会」をそのままに再現して遊んでいた。(写真記録)

この遊びは、以降毎日のように約1ヵ月半の間、いろいろな子どもたちが入れ替わり立ち代わりしながら繰り返し続けていった。そして、1月の下旬には、6人の子どもたちが寄り集まってペープサートを出す順番を決め、絵本を読む子ども(あきこ)、司会をする子ども(ふみこ)など、役割を持って遊ぶ姿が見られた。この時期の子どもの遊びの姿としては、非常にまとまりがあり、しかも、学級の殆どの子どもが参加していく力強さを持った活動の姿であった。

このような姿から、子どもたちは、「親子読書会」の中でお話や手遊びなどの内容だけではなく、母親同士が進めていくときの役割分担や、会の進行のしかたなども含めて、しっかりと心に刻み込んでいたことがわかる。またこのように、母親が活動する様子を見るという経験

が、自分たちの遊びの確かなイメージにつながり、友だち同士が呼応し合う関係を生み出し、その中で遊びを共有し広げていく力を培っていったといえる。こうして、友だち同士が呼応しあって共有してきた遊びの経験は、5期・2月に入って「あてくじ」や「わたあめやさん」など、「ちけっと」を作って異年齢4歳児学級・5歳児学級の子どもたちをも呼び込んでいく活動につながっていった。

なお、「あてくじ」や「ちけっと」などの遊びの内容は、4期11月の「秋まつり」の中で、年長児が展開している活動に参加した経験から生まれたものである。が、子ども同士が響き合って遊びを広げていく力や、遊びを共有していく力の素地となるものとして、母親の「読書会」の活動が大きな影響を与えていると思われる。

6、今年度の試みとして重視してきたこと

いちご組では、「一日保育参観日」「一斉参観日」の他に、任意の「自由参観」を重視してきた。保護者が子どもの日常の様子をつぶさに観察し、いろいろな子どもにふれあい、子どもと遊びを共にする経験を通して、子どもを見る目や理解が深められたと思う。また、学級の保護者と一緒にする活動（EXお別れ会、干し柿づくり、クリスマス会、ひなまつり）を通して、保護者全体に「みんなで子どもを育て合おう」とする態度や保護者同士で支えあおうとする雰囲気が出来てきた。（注1・資料参照）この試みと経験を次年度に生かしたい。

注1—参考資料・母親からの手紙

A たかおは、大好きだったこうたくんとのお別れのあと、お友だちの中に入れない孤独や、心のぶつかり合いを経験して、お友だちの良いところをたくさん発見してきました。

はじめに発見したのがけんくんのやさしさです。「どうしたらけんくんみたいにやさしくなれるの。オレもけんくんみたいにやさしくなりたい」次に発見したのがふきおくんのすごいところ。「ふきおくんがね、せっけん落ちてるのみつけて、きちんと水道のところに掛けたんだよ。すごいねー、えらいねー。先生、みた？みんな見た？」帰り道もずっと言っています。いつも泣いているふきおくんではないことに気づいたのですね。幼稚園でたくさんのお友だちに恵まれ、助けられ、あたたかい気持ちを受け止めて、大きく成長したと感じます。いちご組のみんな、ほんとうに有難うございました。

—3月20日付学級だより掲載の原稿より抜粋—

B 前文略—私（母）にとっても、8年間の幼稚園生活の中で一番良いクラスでした。何が違っていたかと言えば、やはりお母さん同士がみんな仲良くできたということと、どの子にも声をかけることができたということです。あいこ（自分の子ども）の口調がきつくて、こわがられていましたが、お母さんと話をしたり、（相手の）子どもに声をかけたりすることによって、お互いに理解を深めることが出来、親も子も良い関係を続けることが出来ました。

(後略)

—3月22日に受け止めた手紙より抜粋—

C 前文略—普段は、育児を一手に引き受けている私たちですが、子どもたちが幼稚園にいる間は、先生に安心しておあずけすることが出来るので、私たちもちょっと息抜きして、育児に力を抜くこともできました。なんだか見過ごしていた子どもの成長が、先生にかかると、すごい大発見に変わってしまったり、子どもの心の変化におどおどしてしまう私たちを、いつも「大丈夫だから」と励まし安心させて頂いたお陰で親の方が自立できたように思います。私たち一人一人で育てているよりも、子育てがずっと楽しく感じられました。

あと一日でいちごさんは卒業ですが、たんぼぼさん、さくらさんになっても、私たちのよき友人、よき支援者でいてください。

—いちご組保護者代表「先生に贈るメッセージ」原稿より抜粋—